

此不要、不當、不急支出金を合計する時は驚く勿實に

金貳千五百七拾五萬餘圓也

斯の如く彼等が非政の跡を知りて向は彼等を前まらしむるは將來に禍根を残す譯
なれば此際吾々は本舉して彼等を驅逐せざるべからざるなり、石井、安田に非取
締役を授くるの不可なるは勿論伊東社長と共に此際全然無役たらしめざればなら
ざるなり、然らば後に残るべき問題は即ち社長、副社長、専務の後任なるが右は
制度を如何にすべきかの問題に據て以下之れを論ぜむ

◎郵船新内閣如何

近藤、加藤両氏が局に當りたる時は近藤男が専ら業務一切の責に任じ加藤氏は對
政府向く對政黨向く對株主向く對株主向く對株主向く對株主向く對株主向く對株主向く
對し世人の知る處にして當時郵船は日本の海運界の代表たるのみならず國家に
對して多大の貢獻をなしたり、其故に會社を長にして男爵を授けられしは近藤廉
平氏一人たりしなり、加藤副社長退隱して近藤男一身を以て業務を政界向及び株
主向を並轉するに至りて料や衣服を生ずるに至り時々困難を生じたり、其後近藤
男逝きせられて今の伊藤内閣の出現爲すに及びて内は海陸員同僚の輿論を激轉な
らしめ外は株主の信用失墜して海總會に糾弾を來し、郵船總會の紛擾は恰かも丸
の内各物の一と算せらるるに至れり、特に對政府向く對政黨向く對株主向く對株主向く
對何等の交渉を有せず、此一億圓の大會社にして常に國家事業たる對外海運に従
事する會社の重役は政治向に交渉にして如何に業務の進展を圖畫せらしめん
ざしても爲し得ざるなり、近來會社の公私共に大阪商船の苦境に一瞥を轉するも
の、之れ偶然ならざるなり之れが爲には從業海陸社員の不利益たるのみならず株
主一般の不利益なり

故に此機會に於て新内閣を組織せんとするには其政職部は手帳、總算、人格を供
應したる者を選び而して正副社長及二専務制を改むるが善の方法なり斯の如く改
めざるは隱憂等が盛んなる人選をなきむせは先づ左記を以て可なりと信する

一、社長には林民雄氏を推選すること

一、副社長に太刀川又八郎氏を推選すること

一、二専務には大谷武田の兩氏を推選すること

一、相談役は和田豊浩氏と郷誠之助氏を現在の儘煩

と置くこと

林民雄氏は嘗て吾社に在りて現社長伊東等の先輩なり、當然近藤男の衣鉢を襲ふ
可きなりしに罷者に觸せられ部下たりし伊東等の謀反に取かれて職を辭
爲に歐米巡遊中なり此人ならば海陸員共に信望すべし、
而して副社長に太刀川又八郎氏を選びしは同氏は海運界の先輩にして官邊にも氣
受まく且つ各政黨にも有力なる知人多く殊に株主間の消息に通じ居れば之を副社
長とし専務取締役に大谷武田の兩氏を以てすれば所謂通に金採らん人
上同輩の士の術を以て之を配布す者は吾が日本郵船株式會社の爲論なる
御制御さ御奮起あらん事を終りに各位の御健康を祈り茲に筆を止む

株主有志

大正十二年十一月二十五日

罹災海員家族御見舞狀

拜啓

御罹災後無かし萬事御不自由の事と存じまして深く御同
情申上げます本團に於きましては本年九月一日大震災大火
の大變災劫發當時から第一期には何もものをも捨て置き應
急避難並物質配給等焦眉的救護に當りまして第二期には
非常の罹災海員千五百家族に對し平等に毛布代の意味で
一家族毎に金五圓宛を贈呈致しました此外に震災前後に
出帆して未だ歸つて來ない罹災者が澤山ある事と存じま

す
本團の救護事業に對し各組合員からの義捐今尙續々とし
て入金あり又各船會社からも深厚なる同情を以て送られ
たる御寄附を受けて居ります外に此際殊に御知らせて
置きたい事は英國のロイドレジスタター・ナブシツビンズ組
介から日本に於ける委員長々々長堀啓次郎氏を通じて金參
千圓又支那海員及海陸員の寄附を受けた事と存じます
永久に記憶すべき事と存じます

本團は斯の如き貴き同情金を元と致しまして貴下御家族
の御罹災に對し茲許同封の御見舞金を贈呈します幸に目